



## 馬耳東風

「見えない敵との戦い—パストゥール最後の弟子エルサンの生涯—（瀬戸昭＝訳・人文書院）」という本を読んだ。本書は、ペスト菌の発見者である Alexandre Yersin (1863～1943) の生涯を、近年発見されたという彼自身が母親や姉等へ書き送った千通に及ぶ手紙等の豊富な資料を駆使して書かれたものだそうである。ペスト菌の発見に関しては、北里柴三郎がエルサンよりもわずかに早く報告を出したが、彼の報告にはコンタミした連鎖球菌のものと考えられる記述があったことからエルサンに優先権が認められたという経緯がある (Bibel, D. J. & Chen, T. H. : Diagnosis of Plague: an Analysis of the Yersin-Kitasato Controversy. Bacteriol. Rev., 40, 633-651, 1976.)。

私は本書により、エルサンが単なる細菌学者ではなく、ペスト菌発見以後はヴェトナムで獣医学、畜産学、熱帯農業に一生を捧げた人物であることを知り大変驚いた。彼はスイス生まれ、ドイツのマルブルグ、次いでパリで医学教育を受けた後、パストゥールの知遇を得て彼の助手であったルーのもとで学位論文を完成させて彼の助手となった。その後フランス郵船の船医となってサイゴンに赴任し、サイゴン～マニラ航路の船医として一時期を過ごしたのち、植民地医師として働く傍らインドシナ半島を探検し、通過する地域の資源、牧畜の可能性、森林資源、鉱山などの調査を行うとともに、インドシナに蔓延する疾病を調査した。フランスの新しい植民地を疫病から守るためである。彼はインドシナに来て以来、南中国でペストが地方病的にくすぶっている情報を得て、インドシナ総督に雲南のペストを調査して対策を立

てるよう提案していたが省みられなかった。ところが1894年、ペストは広東、香港、アモイに達する事態となったことから、エルサンは香港に派遣されることになった。日本からは北里柴三郎らが派遣されて来て、両者はペスト菌発見の先陣争いをするようになった。エルサンは、ペスト菌発見以後もウマを免疫して得た抗ペスト菌血清を用いて血清療法を試み一定の成果を得、またネズミのノミがペスト菌を媒介するというシモンの報告から、患者のいた家を燃やすよう命じて蔓延を防止する等、彼の活動は実験室に留まらなかった。

その後エルサンは、船から見初めた絵のような漁村ニャチャンに住みたいと願い、フランス政府の補助金を得て、ニャチャン・パストゥール研究所と付属動物実験施設の建設にとりかかった。研究所を機能させるには、実験用小動物のほか免疫血清生産のための大動物を常に飼育しなければならず、そのため飼料用作物の栽培の他、実験室の財源を増やす可能性のある農業にも取り組んだ。ゴムの生産と抗マラリア薬キニーネの生産に用いられるパラゴムの木とキナの木栽培など彼の活動範囲はまことに広い。彼は、「僕は医者を職業にしたいはありません。病人を治療してお金を払えとは僕にはどうしてもいえないからです。」というような男であったという。

本書の記者は、元滋賀医科大学教授の免疫学者でエルサンの生き様に共感し、是非日本で紹介したいと考え、出版のあてもないまま400頁にも及ぶ大部の翻訳を10年近く前に終えていたそうである。世に篤実な碩学はあるものと感銘しきりである。あとがきに獣医学関連については故藤原公策東京大学名誉教授にお世話になったとあった。先生の講義を受けた者として、これもうれしかぎりであった。諸兄弟にご一読をお勧めしたい。(久)